



「国際交流ボランティアに出会って」

おおにしまさこ
大西正子

1941年(昭和16年)
北海道帯広市生まれ
西條崎在住



■ ホームステイしていたチュウ君との再会

最近、友達から「フェイスブックであなたの事を探している人がいるわよ」って言われたの。久しぶりにパソコンを開いてみたら、2001年にホームステイしたチュウ君(チェワードロス・サイル エチオピア出身)だった。イギリスへ帰る時、「世の中の貧しい人を助ける仕事をしたい」と言っていた彼は、国連の仕事をしていたの。

わたしの国際交流ボランティアの始まりは1981年でした。いろんな国の旅行者や大使館の奥様が参加するパーティーでした。友人に誘われて、英語の勉強になるからと参加しました。そこで、日本の家庭が見たいとか、家庭料理が食べたいという方を「うちへどうぞ」と呼び出したのです。子供は手がかからなくなっていましたし、家の仕事もそう忙しかったわけでもないので、喜んで迎えました。家に泊まらないお客様ですから、ホームビジットと言います。日本食に興味がある人たちなので、日本にはこういう食べ物があるのよって、天ぷらを揚げたり、自家製がんもどきを作ってあげるの。汁の中には、お豆腐を。大豆から作ったからヘルシーで、とても身体にいいと言うと、「オオ、デリシヤス」って食べてくれました。

その後ホームステイも始めて、1週間から長い人は3ヶ月の方もいましたね。最初は1986年でケンタッキー州の女の子でした。着物を着せて浅草の観音様や六義園、ディズニーランドにも案内したわ。ホームステイは18年位やっていて、アメリカ、デンマーク、スウェーデン、アイルランド、フランス、イギリスとか、いろんな国から来ていましたね。

■ 帯広から東京へ

北海道の帯広で8人きょうだいの4女として生まれました。父はテーブ商会と言って包装紙や紙袋、紐などの卸売をしていて、豊かな暮らしをしていました。2歳の時、家族全員で亀有(葛飾区)の父の養母のところへ越してきました。ところが、空襲が激しくなるというので、一家は離れ離れに。亀有には母や姉たちが残り、もう1人の姉は集団疎開で福島県の飯坂温泉の方へ、4歳だったわたしと長兄は、元八王子へ疎開したの。元八王子では父が山

を開墾して家建て、そこに住んでいました。父はここで行商をはじめ、カニヤカズノコ、サケの缶詰とかを買って占めて倉庫に保管していたのですが、焼夷弾が落ちてすべて燃えてしまったの。しかも、終戦後には預金封鎖とあって新円切替のために預金を下ろせなくなったんです。それまでの裕福な生活は一転して貧しい生活に。

5年生の時、亀有に転校しました。いじめにもあったわ。なほ 誂りのある言葉に汚い格好、おまけに脱脂粉乳が飲めなかったの、クラスの子に無理やり口を開けて流し込まれたりした。亀有は焼けなかったから、同級生はきちんとしていて、ワンピース着て、革靴をはいてる子もいたの。わたしは我慢するしかなくて。

学校には弁当も持って行けなかった。そしたら、新任の先生がおかずをそっと弁当箱の蓋に分けてくださったの。うどん粉をいっぱい入れた卵焼きでしたが、その味は今でも忘れられない。

亀有では父親は行商をし、ちょっと身体が弱い母親はレース編みの内職をしてました。お料理も上手でしたね。わたしも一家を支えるために朝早く新宿(葛飾区)あたりまで納豆売りに行きました。また、中学3年の時は、口減らして自分から小菅(葛飾区)の床屋に住み込みで働きました。弟子入りしたんですよ。でも、奥さんは身体が弱かったから、ほとんど家のお手伝いさんと同じようなことをさせられて、少しバリカンが使える頃には、栄養失調で脚気になったんですよ。ほとんど学校にも行ってなかったのですが、何とか卒業させていただきました。

■ 主人との出会い

中学校卒業後、上野の職業安定所に行って願書ももらってきました。靴が買えないから、つっかけサンダルで就職試験を受けに行きました。合格して、渋谷の東急文化会館でウェイトレスとして働くことになりました。

高級レストランで、私には別世界でした。夢のような美味しいごちそう。英語のメニュー。ウェイトレスとして働ながら、コックさんに「どうやって作るの」って聞いたり、盛り付け方を見たり、食事のマナーも覚えたの。好奇心が強いね。肉の焼き方とか、デザートとか、頭に入れとくの。た

こちょうらん

どがわの女性

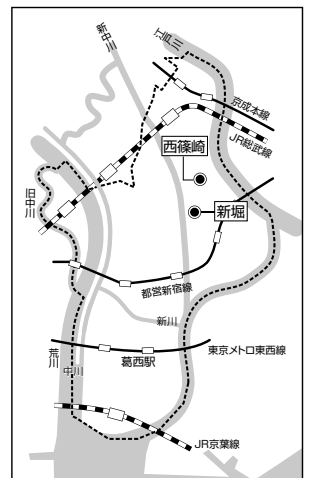
にいほり

よし

ず



◆ゴスフォード出身のマーガレットさん
(2015年10月)



- ◆インタビュー／2015年6月
2015年8月
- ◆聞き手／吉野治子 村田正子
- ◆コーディネーター／樋口政則